

【今年度の結果と取組みについて】

○●国語●○

(領域ごと)

- | | |
|-------------------|-------------|
| ① 言葉の特徴や使い方に関する事項 | 概ね良好な結果であった |
| ② 我が国の言語文化に関する事項 | 概ね良好な結果であった |
| ③ A話すこと・聞くこと | 概ね良好な結果であった |
| ④ B書くこと | 概ね良好な結果であった |
| ⑤ C読むこと | 概ね良好な結果であった |

(問題形式)

- | | |
|-------|-------------|
| ① 選択式 | 概ね良好な結果であった |
| ② 短答式 | 概ね良好な結果であった |
| ② 記述式 | 概ね良好な結果であった |

(無解答率)

概ね良好な結果であった

(その他)

- ・文の中で漢字を正しく書く設問の正答率が一番低く、無解答率も同様に一番高かった。また、時間がたりなかったと答える児童が多く問題の後半に進むにつれて無解答率も高くなっている。
- ・文章の良さを見つけ、元の文章の言葉も使いながらという条件を複数指定される設問については無解答率が高かった。

分析

- ・正答率は全国と比べるとやや下回る結果となった。また、後半の問題になると正答率が下がり、無解答率が上がっている。
- ・基礎、基本の学力は身につけているが、特別な漢字の読み、書きに課題があり、筆順や読み、書きの指導を丁寧に行っていく必要がある。
- ・「記述式」では全国平均を上回るものの、文章の要点と自分の考えを重ねて端的に表現していくことに課題がある。そのため、条件指定された、書く問題学習を今度も積み重ねていく必要がある。
- ・解答時間がたりなかったと答えている児童が多く、時間を意識して問題に取り組めていないことで、最後の問題まで解答できなかったと思われる。時間も意識しながら正確に必要な情報を読み取る力を育てていく必要がある。

〇●算数●〇

(領域ごと)

- | | |
|-----------|-------------|
| ① A数と計算 | 概ね良好な結果であった |
| ② B図形 | 概ね良好な結果であった |
| ③ C変化と関係 | 概ね良好な結果であった |
| ④ Dデータの活用 | 概ね良好な結果であった |

(問題形式)

- | | |
|-------|-------------|
| ① 選択式 | 概ね良好な結果であった |
| ② 短答式 | 概ね良好な結果であった |
| ③ 記述式 | 概ね良好な結果であった |

(無解答率)

概ね良好な結果であった

(その他)

- ・被乗数に空位のある整数の乗法の計算をする設問で一番正答率が高かった。
- ・数量が変わっても割合は変わらないことを理解する設問で正答率が一番低かった。
- ・無回答率0%が16問中、3問あった。
- ・加法と乗法の混合した求め方を解釈し、求め方と答えを記述する設問で一番無回答率が高かった。

分析

- ・国語と比べると算数に対して肯定的な意見が多い。
- ・図形（正三角形）の特徴（角度など）は理解している。
- ・正しく立式することが苦手である。（1回の計算では答えが求められない問題について）
- ・公倍数の正答率が低い。解答している中で公約数を書いている児童が多い。
- ・答えの概算や、見積もりの仕方が不十分な解答が多かった。
- ・プログラミングの正答率が高いのは普段タブレットを使っている効果だと考える。
- ・求め方は理解しているが、式の意味を理解して正しく立式にすることが苦手な傾向が見られる。（1回の計算では答えが求められない問題や式を図や言葉での説明を難しいと考える児童が多い。）
- ・昨年同様、単位量あたり・割合に関わる問題で正答率が低い。もとにする量や比べる量を文章から読みとり、図や式などを用いて、数量の関係を表すような活動を意識して取り入れていく必要がある。
- ・基本を問うような問題であっても問題文に情報がたくさん入ると、正答率が下がる傾向にある。
- ・全体的に無解答が少なく、解答への意欲が見られる。

○●理科●○

(領域ごと)

- | | |
|---------|-------------|
| ① エネルギー | 概ね良好な結果であった |
| ② 粒子 | 概ね良好な結果であった |
| ③ 生命 | 概ね良好な結果であった |
| ④ 地球 | 概ね良好な結果であった |

(問題形式)

- | | |
|-------|-------------|
| ① 選択式 | 概ね良好な結果であった |
| ② 短答式 | 概ね良好な結果であった |
| ③ 記述式 | 概ね良好な結果であった |

(無解答率)

概ね良好な結果であった

(その他)

- ・エネルギーを柱とする領域で正答率が低く、無解答が多い。結果をもとに考察をまとめる取組みが必要である。
- ・粒子を柱とする記述式の問題は正答率が特に低く無解答が多い。
- ・文章で書かれている内容を自分自身で結果としてまとめることが苦手である。

分析

- ・相手の立場にたって分析し解釈して、記述することが苦手である。
- ・結果からわかることをもとに考察につなげることが苦手である。実験から得られた結果を自分の言葉で説明できるようにするとともに、他者の考えを聞き、それに基づいて自分の考えを深めるなど、的確に表現することができる力を育成していく。
- ・基本を問うような問題であっても情報量が多いと、必要な情報と不必要な情報を取捨選択することに難しさを感じる児童が多い。
- ・理科のだけでなく、読解力や、情報の取捨選択など、「問題をつかむ・正しく読み取る」力の育成が必要であり、現在校内で取り組んでいる国語の取組みを継続していく。

○●経年比較●○

全体的な傾向についての分析

令和4年度は国語・算数・理科ともに全国の平均を下回っており、昨年度と比べ正答率が低くなっている。

国語は、昨年度に引き続き、内容を要約し、記述する問題に課題が残る結果となった。

学力高位層と学力低位層、エンパワー層についての分析

国語・算数・理科ともに全国平均と比較しての割合が高く学力高位層の割合が低くなっている。学力高位層と低位層とのいわゆる二極化が進んでいる。

○●取組み●○

学力向上に関する取組み

書く力（記述力）の向上にむけて

「主体的な学びの中でつながっていく子どもたちを育てる」-論理的な文章を書く力の育成について

指導内容を整理した上での、指導方法の追求

- ・「学習用語」を整理し、読みの系統指導で読む力を育むことで、自分の感想・意見をもち、自己表現できる児童を育てていく。また、用語を意識した教材分析（構造と内容の把握）をていねいに行い且つ、子どもが動き出す問いを生み出し意味のある言語活動につなげていく。
- ・めあて”の設定と”ふりかえり”の充実をさせていく。
- ・語彙力をつけるための取り組みを継続していく。（言葉集め、辞書の活用）
- ・小作文の取り組みなど文章を書くことに慣れるための取り組みの頻度を増やしていく。
- ・子どもが書いた作文・感想などに対するフィードバックを行っていく。

自ら伝える力

- ・話型を活用しながら話せる場面をたくさん作っていく。
- ・互いの意見のよさを生かした解決方法を深化させ、受け取る側の力も育成していく。学級活動の内容を充実させ、安心して発信できる場をさらに設けていく。
- ・委員会活動や異学年交流などで、よりよい学校にしていこうために自分たちができることを話し合い、発信する場を設定する。

国語好き・算数好きの児童を育てる

- ・学習意欲を高められるような、ユニバーサルデザインを意識した授業づくりを心がける。
- ・学習した内容を実際に使えるような、活用場面を積極的に設定し、”できた”や”わかった”と実感を持つ事ができるように、ていねいな評価をしていく。
- ・1時間の授業の流れを工夫し、子どもたちが「一人でも問題が解けた」という喜びや達成感を感じられるような授業を行う。
- ・学期に一度、全教員で高学年を中心とした補充学習を行う。それぞれの児童の実態に応じた（領域に分かれて）学習をすることで、基礎基本の定着を図る。